HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	送る言葉
著者	小柳，敦史；KOYANAGI，Atsushi
引用	北海学園大学人文論集(74)：89-94
発行日	2023-03-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

送る言葉

北海学園大学人文学部英米文化学科　小　柳　敦　史

安酸敏眞先生が6年の任期を終えて学長を退任されると同時に，北海学園大学を退職されることになります。私は安酸先生が学長に就任された2017年4月に北海学園大学人文学部に着任したので，北海学園大学ではもっぱら学長としての安酸先生の姿しか存じ上げません。従いまして，『人文論集』に安酸先生を送る言葉を記すのに私はあまり適役とは言えないのですが，安酸先生に感謝を伝えることのできる貴重な機会なので，僭越ながらお引き受けいたしました。

当時の私のように北海学園大学の外におり，学問を通じて安酸先生を知っていた者はみな，安酸先生が学長に選出されたことを知って驚いたものです。なぜなら，安酸先生は，堅実で重厚な思想史研究の大家として知られており，学長職のような《俗事》からは努めて距離を取っているという印象があったからです。2022年8月に，日本基督教学会北海道支部のシンポジウムでのご自身の講演に安酸先生は「『わたしの著書』――Einzelgängerの足跡」というタイトルを付けました。Einzelgängerとは，「独歩者」あるいは「一匹狼」というような意味であり，キリスト教思想研究に携わる者にとってもまた，安酸先生は孤高の研究者であるというのが一般的なイメージであると言えるでしょう。学長就任以前の経歴や業績をここで詳しく紹介することは必要ないと思いますが，安酸先生の研究において主要な関心の対象となってきた，18世紀ドイツの思想家レッシングに関する著作と，19世紀末から20世紀初頭にかけてドイツで活躍した神学者・哲学者であるトレルチに関する著作が，いずれもオックスフォード大学出版からアメリカ宗教アカデミーの叢書の一部として出版されているという事実は特筆しておかねばなりません。難解で知られる思想家のテクス

トをドイツ語で読み込み，世界中の研究者と読者に向けて英語の単著として発表するのはとてつもなく大変な作業ですが，それをレッシングとトレルチという時代の異なる対象について二度行い，その両方が定評ある叢書に収められていることは，少なくとも我が国の近代キリスト教思想研究においては他の追随を許さない偉業です。学会や研究会の懇親会で安酸学長のことが話題になった際に，他の大学に所属する研究者たちから「安酸先生のような立派な学者を学長に選ぶというのは，北海学園大学の皆さんの高い見識を示していますね」と言われ，鼻の高い思いをしたことは一度や二度ではありません。

とはいえ，立派な研究者がすなわち良き学長であるとは限らないでしょう。「孤高の研究者」であればなおのこと不安もよぎります。しかし，この不安が杞憂でしかなかったことは，学長としての安酸先生の働きを知る人間には明らかでしょう。学長在任期間の後半はコロナ禍と重なりました。研究者という一家言ある人間が集まり，またそれぞれに基本的な発想を異にする学部を擁する組織である総合大学の舵取りは，緊急時にあってひときわ困難を極めたはずです。しかし安酸学長はこの難しい時期にある大学に落ち着きをもたらし，導いてくださいました。とりわけ印象深かったのは，コロナ禍が始まって間もない 2020 年 4 月に，学生に対する総額 5 億円の給付金を支給したことに加え，その他の奨学金の拡充も図り，そうした支援のための寄付を広く学内外に呼びかけたことです。安酸先生はかねてから，欧米では市民同士の支え合いの実践として当たり前になされている寄付と慈善（チャリティ）の重要性を語っておられました。コロナ禍における学生への支援とそのための寄付の呼びかけは，大学という組織は国の補助金と学費収入にのみ依存するのではなく，市民社会によって支えられるべきものであるという安酸先生の考えが具体化したものだと言えます。そしてこのような働きにおいて，孤高な研究者のなかに秘められていた，大学を，そして社会をより良きものにしたいという情熱が発露していたのです。

ご本人が優れた研究者である安酸先生によって，本学の研究環境が大幅

に改善したことも多くの教員が実感していることでしょう。研究費が今日の研究活動に合わせて柔軟になったことは代表的な例です。私が着任した６年前には，基本的には出張のための「車馬賃」と図書費しか個人研究費に含まれていなかったことを思い返すと隔世の感があります。また，北海学園大学出版会が 2019 年に設立され，研究成果を公表する手段が身近に用意されたことも，本学の研究活動を一層活性化し，社会に開かれたものとする道を開きました。

時おり私が学長室を覗き込むと，中へと招き入れてくださり，近況をお話しする機会がありました。その際，安酸先生はしばしば「現在の私の一番の仕事はより良い大学にすることですから，研究者としてはもう店じまいです」とか，「なかなか忙しくて，三日間もドイツ語のテクストを読めないんです。そうすると，カンが鈍ってしまってダメですね」というようなことをおっしゃっていました。学長とは比べものにならないほどわずかな業務しかないにもかかわらず，３カ月くらいドイツ語に触れないことがザラになっている私には恐ろしい言葉でしたが，そのような研鑽を長年積み重ねて来たからこそ安酸先生のお仕事が生み出されてきたものだと納得したものです。しかし，驚くべきことに，そのような多忙な学長職に身を砕きながらも，安酸先生は研究活動と著作活動を止めることはありませんでした。学長在職中に何冊かの本が刊行されましたが，とりわけ日本の学術界へのインパクトが大きかったのは，18 世紀終わりから 19 世紀前半にドイツで活躍した神学者シュライアマハーの大著『キリスト教信仰』の翻訳出版（教文館，2020 年）です。この書物は近代プロテスタント神学の最重要著作の一つでありながら，その難解な内容によりこれまで誰も翻訳を成し遂げることができませんでした。本書の翻訳により，近代プロテスタント神学の精髄に日本語で触れることができるようになったことは，キリスト教研究に従事する者にとってのみならず，近代ヨーロッパの哲学，文学，歴史，政治思想などに関心を持つ読者にとって極めて大きな意義を有しています。

学長在職中の研究活動としては，安酸先生の盟友であり，トレルチ研究

の世界的権威である，ミュンヘン大学名誉教授のＦ・Ｗ・グラーフ教授を2019年秋に日本へ招聘し，北海学園大学・京都大学・東京大学・東北学院大学でシンポジウム等のイベントを開催したことも感慨深く思い出されます。私もトレルチを主たる研究対象にしていますので，安酸先生とグラーフ先生という，尊敬する ── が故にいつかは乗り越えなくてはならない ── 偉大なトレルチ研究者と多くの時間をご一緒できたことは，とても貴重な経験でした。なお，この時各地で行われた講演の記録は，北海学園大学出版会の第一号出版物として『真理の多形性』のタイトルで出版されています。

学長就任により，人文学部の教育からは離れた安酸先生でしたが，大学院生への指導は継続され，長年にわたり安酸先生の指導を受けてきた塩濱健児氏が，2018年3月にトレルチについての博士学位論文により，文学研究科英米文化専攻で最初の博士学位を取得したことも学長在職期間中の喜ばしい出来事でした。なお，塩濱氏の博士論文で重要な役割を果たしている「脱歴史化」のモチーフをめぐっては，私と安酸先生の解釈には大きな差があります。私は『年報　新人文学』第15号（2018年）において，「脱歴史化」はトレルチ自身において積極的な意味は与えられていないが，興味深いモチーフであると評価しました。これに対して安酸先生は2020年の著書『キリスト教思想史の隠れた水脈』（知泉書館）において，「脱歴史化」のモチーフはトレルチ自身の歴史主義を理解するための重要な概念だと評価しているのです。トレルチの同じテクストに基づいてまったく異なった解釈が出てくるところに思想史研究の面白さを感じます。おそらく，私も安酸先生もお互いを納得させるには至っていないので，今後も機会がいただけるなら，議論を続けられることを願っています。

現在，私は安酸先生が担当されていた科目である「人文学概論」を，安酸先生が執筆された『人文学概論　増補改訂版』（知泉書館，2018年）を教科書として用いて講義しています。人文学部の教職員と学生の皆さんはご存知の通り，この授業は人文学部での学びの導入として，１年生の前期に必修科目として置かれています。そして，人文学部の教職員と学生の皆さ

んはやはりご存知の通り，『人文学概論』という教科書は大変に格調高く，重厚な内容を持った書物です。学期の初めには受講生からしばしば「なんでこんな難しい本を教科書にしているのですか？　学長が著者だからですか？」という質問が寄せられます。この文章を読む学生もいるでしょうから断言しておきますが，もちろん，そういうことではありません！　人文学の入門書は何冊かありますが，いずれも文学の部分は文学の専門家，歴史の部分は歴史の専門家，哲学の部分は哲学の専門家が書いた，複数の著者による論集の形式をとっており，一人の著者が人文学の幅広い領域について記した書物は，安酸先生の『人文学概論』の他に存在しないのです。「専門領域に詳しい人が分担して書いた本の方が良いのでは？」という疑問があるかもしれません。確かに，ある程度人文学の全体像が把握できていて，各分野についてさらに詳しく学びたいという段階の学生・読者には，論集タイプの本が専門的な知識を提供してくれるという意味で有効でしょう。しかし，論集タイプの本は，文学や歴史といった人文学の諸分野間の関係づけや体系的な理解を読者に委ねます。それは，これから人文学の見取り図を得ようとしている初学者にとって容易な作業ではありません。それゆえ，たとえ内容に偏りや，場合によっては誤りが含まれているとしても，「人文学」というものについて一定の見取り図を描くことを一人の著者が引き受け，その結果を提示する書物が，人文学への導きとしてはより適切なのです。実際，学期当初に上がっていた「なんでこんなに難しい本を教科書に…」という疑問（あるいは不満）は後半になるとかなり減っていき，「なぜ，著者はここを強調しているのですか？」という著者の意図を問う質問や，「この箇所の記述は前に読んだ〇〇章の内容を踏まえると納得がいきます」といった本の全体を視野に入れた考察が増えていきます。人文学についての一人の著者による全体的な理解が提示されていればこそ，そのような読み方へと読者は導かれます。そしてこれは，文化現象についての先人の理解（を記したテクスト）と対話をするという，人文学の基礎的方法論を身につける経験となります。当然ながら，人文学の研究者であれば誰もが人文学についての全体的な理解を一人で描けるというわけでは

ありません。『人文学概論』は，安酸先生の広範な学識と体系的な思索力があってこそ可能になった尋常ならざる著作であり，だからこそ類書が存在しないのです。この著作は北海学園大学人文学部の「人文学概論」の授業で安酸先生自身が教科書として用いるために執筆されました。この尋常ならざる著作は，私たち人文学部の全員にとってかけがえのない共有財産に他なりません。とは言え，現在この授業を担当している者としては，いつまでもこの財産に頼っていくわけにはいかず，私なりの『人文学概論』を書かなくてはならないのかもしれません。しかし，それは大変な課題です。せめて，あと 10 年は「人文学概論」を担当しながら研鑽を積む時間をいただきたいと思います。安酸先生からいただいた財産の豊かさに感謝すると同時に，それを創造的に引き継いでゆく責任の大きさを思うと，途方に暮れるばかりです。

安酸先生は 2021 年 6 月より学校法人北海学園理事長を兼任されています。少し前に安酸先生とお話しした際に，「理事長としていろいろとやらなければならないことがあるし，もう研究は店じまいです」とおっしゃっていました。私は安酸先生の学識と人格に全幅の尊敬と信頼を寄せる者ですが，この言葉だけは信じていません。研究面でも，まだまだ教えていただきたいことがたくさんあります。現在，共同で進めている有賀鐵太郎研究は是非とも形にいたしましょう。それから，トレルチについての研究成果を日本語の書物として一冊にまとめるというのはいかがでしょうか。「送る言葉」の場を借りて安酸先生に感謝を伝えようとしたはずが，最後は単なるおねだりになってしまいました。どうぞ今後とも，人文学部に，北海学園大学に，そしてまた，日本のキリスト教学に，進むべき道を示し続けていただきたく存じます。